

李賢峻氏の「描かれる舞姫、描かせる舞姫—崔承喜（1911～1969）における朝鮮文化の表象」は、朝鮮半島出身の舞踊家崔承喜を、幾多の新しい資料を駆使して論じた労作である。

本論文は、第一章「『SAI SHOKI PAMPHLET』が語る〈崔承喜〉」、第二章「映画『半島の舞姫』をめぐる崔承喜のイメージ表象」、第三章「発信する朝鮮の舞姫の舞踊写真、越境する日本帝国文化」、第四章「アジア・太平洋戦争期の日本画壇と崔承喜舞踊画」、第五章「戦前から戦後における日韓の文壇と崔承喜」、及び序章と終章、さらには別冊資料からなる。以下、論文の構成にしたがって論文の概要を示す。

序章は、崔承喜（1911～1969）という舞踊家の経歴の概略を記し、研究の意義と研究史に触れ、本論文の位置づけを述べる。崔承喜は、日本で石井漠に現代舞踊を学び、朝鮮をはじめ、日本、アメリカ、ヨーロッパにおいて舞踊公演を行い、戦後は越北芸術家として冷戦期を生き抜いた。その波乱の生涯は、20世紀の東アジアの歴史に翻弄されつつ、みずからの才能と努力により舞踊家としての道を切り開いた矚目すべきものであり、強く今日的な関心を引く。李賢峻氏は、韓国と日本における崔承喜研究の現状を確認した上で、戦前の日本において崔承喜が絵画、彫刻、写真、映画、小説等の諸ジャンルでの表象において、舞踊家としての活動の主体性をいかに確保し、自己のイメージをいかに戦略的に作りあげていったかを論じようとする。それは、崔承喜が「チェスンヒ」であり「サイショウキ」でもあった戦前の歴史的な文脈を再現する作業である。

第一章は、1934年から1936年にかけて刊行された全三冊のグラフ雑誌『SAI SHOKI PAMPHLET』を論じる。崔承喜は1934年に日本青年館で行った公演により一躍脚光を浴びる。この人気を受けて刊行をみた『SAI SHOKI PAMPHLET』に寄せられた当時の文化人たちの批評には、日本文化に包摂される朝鮮の伝統という植民地言説が明らかであるが、崔承喜はそうした言説の枠組みを自己宣伝・自己表象に巧みに利用した。1930年代の日本の多様な社会的勢力が相互に牽制する場において、モダンダンスに「エヘヤノアラ」といった朝鮮舞踊を織り交ぜたところに、それは裏づけられる。『SAI SHOKI PAMPHLET』には夫安漠がもつめた「朝鮮心」や、師石井漠が固執したモダンダンスの美学、さらには多数の広告にみられる近代都市文化のイメージなどが混在する。李賢峻氏はそれらに「崔承喜」を表象しようとする戦略の意図を認め、評価する。

第二章は、1936年に公開された自伝的映画『半島の舞姫』を取りあげ、あわせて1930年代に定着してゆく「サイショウキ物語」を論じる。今日出海が脚本と監督をつとめた『半島の舞姫』はフィルムとして現存しないが、映画の原作となった湯浅克衛の『怒濤の譜』、崔承喜自身による自叙伝『私の自叙伝』、さらには映画のスチール写真及び広告等によって、その内容がある程度再現できる。映画は、白雪姫（ハクセツキ）という少女が恋人を頼って上京し、現代舞踊家に師事し、苦労の末に成功するというストーリーを追うにすぎないが、興行的には成功し、崔承喜の人気を高めた。映画が生み出すイメージとしての「サ

イショウキ物語」は、朝鮮舞踊をめぐる見る者と見られる者との政治的・文化的力学の場となり、内部に大きな葛藤を抱えることになるが、李賢峻氏はそこに朝鮮舞踊を踊るモダン・ダンサーとしての崔承喜自身の自己表象を認めようとする。これに連なるモダン・ガールのイメージは広告写真等において広く消費されることになるのである。

第三章は、1930年代に撮影された崔承喜を被写体とする写真を論じる。写真は崔承喜が舞踊家として自己の肢体、姿態、表情、衣装等を表象するにあたって最も重要な媒体であった。ただし残された写真は撮影者、撮影場所が不明のものや個人蔵のものが多い。李賢峻氏は多くの新発見の写真とともにこれらを系統づけ、広告写真、芸術写真、政治プロパガンダ、民族表象としての舞踊写真を読み解く。李賢峻氏の整理・紹介により、被写体としての崔承喜が戦前のモダニズム写真・美術の動きとどう結びついたか、対外文化宣伝誌『NIPPON』等における地方色としての朝鮮文化の表象という事態や1937年にはじまる長期の海外公演が必然的に帯びる政治性に、崔承喜がいかに対峙したのかが示されるのである。

第四章は、踊る崔承喜をモデルとして日本人芸術家が制作した絵画や彫刻を論じる。崔承喜は3年に及んだ欧米巡業の後、1942年と1944年に帝劇での連続独舞公演を成功させる。1944年には公演と併せて崔承喜舞踊画鑑賞会が開催され、多くの絵画と彫刻が展覧された。李賢峻氏は出品作を丹念に洗い出し、画題、作者名等を同定して資料として系統的に提示するとともに、それら「東洋」や「朝鮮」を主なモチーフとする作品が崔承喜の依頼によって制作された経緯を明らかにし、自己の表象をめぐる崔承喜の戦略を明らかにする。

第五章は、戦前戦後の文学からみた崔承喜を論じる。崔承喜の兄崔承一と夫安漢はプロレタリア文学運動の強い影響下にあった。彼らの思想的感化が崔承喜に及んだことは容易に想像できる。一方で崔承喜は、趙芝薫の詩「僧の舞」や川端康成の『舞姫』に描かれもする。そうした相互交渉を文学の場で辿る記述である。

以上のように要約される本論文に対し、審査委員からは、崔承喜に関する多くの資料を、個人蔵のものも含めて発掘・整理した努力への評価が一致して示された。本文に挿入された図版と別冊の表の資料的価値はきわめて高い。また、先行研究に誠実に向きあいつつも、抵抗か同化かという二項対立的な議論からは距離を置いて、1930年代から終戦時までの活動を実証的に跡づけ、舞踊家崔承喜の内面的葛藤にまで迫ろうとした点も評価できる。審査委員には、創氏改名の動きがあるなかで崔承喜はなぜ崔承喜でいられたのか、そもそも崔承喜はなぜこれほどに日本の知識人・芸術家の関心を集め得たのかという点をめぐる学問的関心も惹起された。一方で、崔承喜の評価になお民族主義的思考の枠組みを残す点、崔承喜の舞踊そのものを論じる記述に手薄なところがある点、各ジャンルの特性により深い理解が求められる点などが指摘された。第五章には材料及び論点が尽くされない憾みが残る。また提示された資料の解釈において異なる意見が表明される場面もあった。ただし、これらは本論の学術的価値を本質において損なうものではないことも、審査委員の間で確認された。

以上の判断により、本審査委員会は、李賢峻氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。